

ひたちのくにそうしゃぐうさいれい し し だ し ぎょうじ 常陸國總社宮祭礼の獅子・山車・ささら行事

石岡市指定無形民俗文化財（令和3年10月20日指定）

石岡市教育委員会 谷仲俊雄

行事の概要

常陸國總社宮祭礼の獅子・山車・ささら行事は、常陸國總社宮の例大祭（石岡のおまつり）に伴って巡行する祭礼風流の行事です。氏子の町内より、多数の獅子や山車が曳き出されます。

獅子 道路に充満する魑魅魍魎を呪圧するため歩行し、民家の悪魔払いもするという「行道獅子」です。獅子頭の後ろに車輪付きの「獅子小屋（屋台）」がつき、幌が「獅子小屋」を隠すように覆うことから「幌獅子」と呼ばれます。小屋内部に囃子方を入れて行道する「屋台獅子」の形態をとりますが、独自の形相をもっています。お囃子に合わせて前方では獅子舞をしながら進んでいきます。

嘉永7年（1854）や安政3年（1856）の「香丸組御用留」には、愛宕神社の祭礼風流として「土橋町の大獅子」が記録されていて、今のところ史料の初見となります。

紀年銘から現在確認できる最古の獅子頭は仲之内の獅子頭で、明治29年（1896）同町の福德稲荷神社祭礼の際に製作奉納されたものです。

明治33年（1900）以降土橋町・仲之内の獅子は神輿渡御の露払いを務めています。後に他の町内も競って獅子を出すようになります。令和元年現在では、32町内から33台の幌獅子が出されています。

山車 二層から三層構造で、最上部には依り代となる人形が乗り、中層が踊り舞台となり、「石岡囃子」と総称される山車囃子の演奏に伴い踊り手が踊りを行います。いわゆる江戸型の山車ですが、舞台上では踊りと笛・鉦の演奏のみで、太鼓は側面に組み立てられた場所で奏される独自のものとなっています。

明治29年（1896）に建造された中町の江戸型山車を嚆矢とします。それまで「踊屋台」はありましたが、人形を依り代とする江戸型山車はありませんでした。以後、明治35年（1902）の新年番制度の誕生とともに各町内も競って山車を建造し、幌獅子とともに祭礼風流の主役となっていきます。令和元年現在では、12町内から12台の山車が出されています。

ささら 一人立ちの3人1組からなる三匹獅子舞で、獅子頭をつけた3体の人形をそれぞれ2本の棒によって操る「棒ささら」です。人形は老獅子、雌獅子、若獅子と

呼ばれ、老獅子と若獅子には2本の角があり、若獅子の角には金箔が貼られています。

ささらの頭は一般的には狛犬、鹿、猪、龍などをかたどり、なかでも「狛犬型」が多く見られますが、本例は「龍頭型」を呈しています。

富田町が有する全町内唯一の祭礼風流で、神輿渡御の露払いを務めています。明和年間（1764-1772）の祇園祭りにおいてすでに神幸行列の先頭を務めており、青屋祭りの先払いに起源を持つ可能性があります。

現在のささらの製作年代は不明ですが、屋台前の角2ヶ所にある擬宝珠には「嘉永二年（1849）西六月日富田町」と刻まれています。

行事の評価

本行事は歴史的にみると、幌獅子が広く巡行されるようになったのは明治33年以降、山車についても明治29年以降で、その後整備されてきた行事で歴史の古いものではありません。また、天下祭りに代表される江戸の都市祭礼の影響が随所にうかがわれ、その影響を受けながら発展してきたものです。

しかし、江戸型山車においても踊りを主とし、太鼓を側面に配するなど、「石岡的な変容」を行っています。そこに、きわめて独自の幌獅子や、在地性の強いささらが融合し、地域固有な祭礼文化へと発展を遂げています。また、土浦や小川、柿岡など、周辺の地域のお祭りや祭囃子にも影響を与えているのも特徴で、独自のお祭り文化圏を形成していて、この地方を代表する重要な行事と言えます。

文献

金 賢貞 2013『「創られた伝統」と生きる』青弓社

木村竹次 1994「昭和の石岡の祭り」『写真集いしおか昭和の肖像』写真に見る石岡の昭和史研究会

櫻井 明 1997「祭礼の伝承—常陸総社宮祭礼—」『常府石岡の歴史』石岡市教育委員会

常陸國總社宮例大祭文化財指定検討協議会 2020『常陸國總社宮例大祭（石岡のおまつり）の歴史と現況』石岡市

茂木 栄・島田 潔 1995「常陸国総社宮に関わる祭要素の持続と変化」『國學院大學日本文化研究所紀要』第75輯

常陸國總社宮祭礼の獅子・山車・ささら行事

令和3年10月20日 石岡市指定無形民俗文化財

保護団体：常陸國總社宮例大祭文化財指定検討協議会

独自の「幌獅子」

獅子

幌のなかの胴部に屋台を納め、そこに囃子方をいれて行道する「幌獅子」

由来 嘉永7年(1854)・安政3年(1856)

『香丸組御用留』…「土橋町の大獅子」

「仲之内の獅子頭」…明治29年(1886)製作奉納

⇒ 明治33年(1900)以降、土橋町・仲之内の獅子は、神輿渡御の露払いを務める

⇒ 他町内も競って獅子を出すようになり、32町内33台（令和元年現在）



「江戸型山車」の改造

山車

二層から三層構造で、中層が舞台、最上層には依り代となる人形が乗る「江戸型山車」

通常の江戸型山車では、太鼓・笛・鉦といった演奏は全て舞台上で行われ、踊りは補助的

⇒ 石岡では舞台上は踊りと笛・鉦で、太鼓は側面

由来 明治29年(1886)建造の「中町の山車」（人形は三代目原舟月の優品「日本武尊」）

※それまでは「踊屋台」のみ

⇒ 明治35年(1902)の新年番制度誕生とともに、他町内も競って山車を建造。12町内12台（令和元年現在）



伝統の「棒ささら」

ささら

一人立ちの3人1組からなる「三匹獅子舞」

由来 神輿渡御の露払いを務めるが、明和年間(1764-1772)の祇園祭においてすでに神幸行列の先頭を務めており、青屋祭りの先払いに起源をもつ可能性がある

屋台前の擬宝珠…「嘉永二年(1849)西六月日雷田町」

⇒ 「ささら」とセットになる「弥勒（みろく）」（木之地に伝わるが、昭和9年を最後に廃れる）

⇒ 常陸国の中心たる石岡・水戸にみられた地域固有な在地性の強い出し物



地域固有な祭礼文化へと発展

土浦や小川、柿岡など、周辺の地域のお祭りや祭囃子にも影響

石岡市だけではなく、茨城県を代表する重要な行事

個性豊かな獅子頭



森木町



富田町



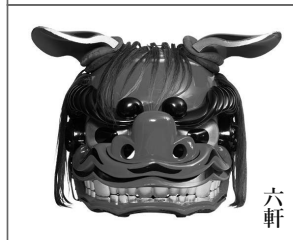
幸町



星の宮



水久保



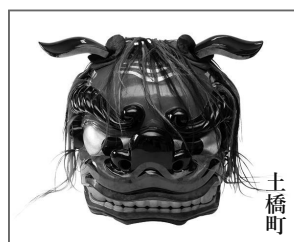
六軒



小川道



大和町



土橋町



仲之内



國分町



鹿の子



北の谷



山王台



東町



大砂



金丸町



宮下町



若松町



茨城



ぼらき台



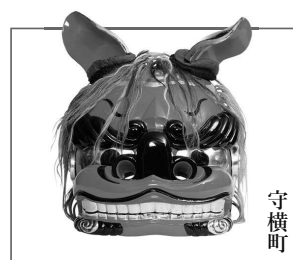
元真地



若松東



正上内



守横町



青木町



泉町



貝地



兵崎



六軒東



出し山



南台

山車人形とささら

				
菅原道真[森木町]	桃太郎[大小路町]	弁財天[金丸町]	静御前[守横町]	楠木正成[富田町]
				
神武天皇[青木町]	老獅子	雌獅子	若獅子	武甕槌命[幸町]
				
仁徳天皇[國分町]	日本武尊[中町]	八幡太郎[若松町]	鍾馗[泉町]	聖徳太子[香丸町]

『常陸國總社宮例大祭(石岡のおまつり)の歴史と現況-石岡のおまつり歴史実態調査報告書-』令和2年3月発行より作成